

◇ 雨音を聞きながら ◇

多田龍介

◆ 目次

逃げよ、逃げよ	6
つらつら思うに	8
もてあます	10
正しい距離感	11
雨音を聞きながら	12
憂鬱、第四波	14
宿題	16
誰をか頼らん	18
迷い道	20
オタクの考察	22

どんな言葉で	24
一本ではない	26
歌草	28
しこり溶けたら	30
泡はじけて	32
アルキメデスが現代で	34
なぜ笑ってたんだろう	36
サルベージ	38
インシャラー	40
All in my mind	42
あとがき	45





逃げよ、逃げよ

女同士ですらついて行けまい

わかるゝ

わかるゝ

わか

わ

ごめん、ちよつとわかんない

こういう具合だ

そんなんでやれるものならやってごらん

もちろんやれてないのだ

割を食う周り

つらい

会社の付き合いでもつらいだろうけど  
逃げ場がないというのはこれまた  
心を砕いた時間、プライスレス

## つらつら思うに

このままの経緯で推移すれば……

ダメです、破滅しますっ

というシミュレーションから

落ちるさまを、ええ

ただ見ていたと

やれこうしてやろうとか

伸ばしてやろうとか

縮めてやろうとか

およそ狙いが

叶ったことがない



叶う人もいるんじゃないか

政治家とか

叶ってこれなんだ

キツイな

ああ、キツイ

もてあます

求めても得られないとは求不得苦

求められ立たないという老いですな

通院し痛飲をして種腐る

## 正しい距離感

まぐわいの仕方也不知らず縊れる人

色欲の枯れることなく集う人

足して二で割れることない前後者

蜂蜜に見えるか俺の毒水が

先思ふあとどれくらい持つだろう

雨音を聞きながら

どうも厳しいです  
厳しいでしような

BLはいいんですかと  
舌なめずりキツイ

ブロックはいい機能だ  
使わずにけなすなかれ

身を守れ

君を傷つけるものから

もう傷ついてましてん  
じゃ、養生しよう



## 憂鬱、第四波

たとえばワクチン打ったら翌日、死んでいたなんて人が少なからずいるんでしょう

報道が取り上げるべきは

そういう人たちだったのであつて

この度の不始末、語り継がれることでしょう  
一人だつて多すぎます

そして僕の親を見る

五回、六回、喜んでの姿勢である

もちろん、相性の悪かった人への共感はい  
みじんもない

とはいえ親なのよ、とはいえ

こんなで取られちゃたまらないわ

と、心が叫んでいるのであった

## 宿題

あべしは改心しないまま死んだって言うんですよ  
ステージが低いまま死んだって

おっと怪しげな宗教臭

そもあなたは改心の見込みがあるんですかと

ないな、うん、ない

四十過ぎて改心とか無理とは母

一角ひとかじの者ならば自負がある

だからそう簡単には

こうして間違いだらけで生きていくのだ、人間は  
それが間違いであつたなどと、誰が言えよう



あ、でも他人をべるとか、そういうのはちよつと  
恐ろしいのは締め切りだ、と夏休みの宿題

誰をか頼らん

碎けてる

このまま行ったら

どうなるか

粉骨碎身術

をござん

折れたまま

繋がったりも

するもので

診てもらったほうが

いいですよ

完璧な

縫合跡だ

ブラックジャック君

っていてくれたら

あゝ

## 迷い道

父母が長くない

コロナだワクチンだこれだけ傷めたら

親戚も危うい

自粛下で葬式も辛い

そもなんでこんな騒いでんの？

ノーバディノウズ



## オタクの考察

るろうに剣心などの漫画の戦闘は  
剣術の前に説教戦である

説教で勝ち、次いで剣で勝つ

勝てば官軍という言葉もあるが  
確認したい

正しいから勝ったんですか？  
勝ったから正しいんですか？

後者だとしたらまずいことだよ、君い

まあ難しいことはわからないので  
実際に戦闘を見て

説教が、通じない

できることはありませ……

生きてる人が勝ちなんだと聞いた

じゃ、僕らみんな負けるんだと

いあいあ、とりあえず今日を

生きよう

## どんな言葉で

アンチすら擁護に変えるダメアンチ

反射じゃね、ていうかただの反社じゃね

伝えられないものと知る美の秘訣

伝えなくていいんじゃないか美の巨人

うろちよろす子を見る思い五十路女子





## 一本ではない

姉が玉子焼き用の四角いフライパンで

目玉焼きを焼いている

合う蓋はないので

横から湯気は洩れるが

面白い発想に見えた

僕は丸い小さめの普通のフライパンで

目玉焼きを焼く

かように遠くで暮らしていると

癖やメソッドや好みが違う

当たり前、当たり前、当たり前

これはAが優れてBが劣るというような  
問題ではないのだ

君の一本道の進歩観を  
多々野辺のどこへともない道に  
考え直してみてもどうだろう

## 歌草

たぶん世間の醜聞や怪奇譚を  
編集者が集めていて

それを作家に耳打ちするのだ

元ネタが、0から作るんじゃないんだ  
そりゃそうさ

0から作ってるのは僕くらいのものだよ

ただ靈感を受けて書いてるとか

素朴に思いすぎないように

たぶん灵感もあるだろうがね

もしかしたら

ファミレスに座って書くだけで

十分なのかもしれない

他の客の話はつまるところ醜聞と怪奇譚  
下世話なゴシップを奪えば何もないのだ  
そんなことないよ、おばけなんてないよ

しこり溶けたら

まず恨みがある

怒りがある

その発散として

正義の鉄槌<sup>てつづい</sup>を

探しているんだ

ええ、では正義が

八つ当たりだったと

そうなのです

政治批判も人道主義も

的を得たことがない

どのみち、こんなに人を  
窮々にする正義は  
間違っている  
たとえ僕が間違つても  
こんな正しさはいらない

## 泡はじけて

パワハラ賞状のニュースを見るに、どうもかなりおかしいように見える。上司は五十代くらいだろう。高度経済成長期からバブルにかけて、日本人は狂ったように働いたと読んだ。実際、狂ってたんじゃないか。二十四時間戦えますかなんて精力剤のコピーもあった昔。

心が置き去りになる。

精神医療を批判されて医者が、我々の努力を人権屋の批判で台無しにさせないとの文を書いていたようだ。ちゃんと患者に接してきたって。それはいいんだけど、人権屋という言葉が出てくるのが気になる。人権を軽視して道はなし。倫理崩壊の現状。あとは数の暴力があるだけ。

この国が更新に失敗したということ。昔のやり方でまだやりたがっていること。しかしそれは先がないこと。いいじゃないですか。僕は生ぬるく見守るだけです。





## アルキメデスが現代で

どんなことにも耐えられる力があるじゃないか！  
と言っていた僕の心は

一回の入院で折れました

耐えられるわけあるかいや

人には耐えられない痛みがある

あとは養生あるのみ

僕そういうのが見たいなく

我、発見せりと高ぶった人が

次の瞬間、何もかも間違いであつたと言ふような

ヒドイ

酷<sup>ひど</sup>い思考です

傷つくほどやさしくなれるというのは

本当かなと思います

実は人は傷つくと他人も同じ目に  
遭わせたくなくなってしまうのだ

いあ、傷が十分癒され昇華されていたならば  
優しくなることもあるだろう

だから養生

優しくなりたい

なぜ笑ってたんだろう

A 倍、K 泉、A 生、K 田といった面々が  
料亭で高笑いしている写真を見た

胸くそ悪かった

庶民がずっと苦しんでいた時に  
という思いがして

ものは受け取りようだ

彼らはりゆうさんが生き、活躍する

今が嬉しかったのだ

そう思えばいい笑顔に

見えてこないかい

あるいはこうかもしれぬ

彼らはりゅうさんが虫の息で

嬉しかったのだ

許せん……

一度りゅうさんから離れてみてはどうだろう

## サルベージ

ボケとは何か考える

長く生きてると嫌なことがある

嫌な話をあぼーん設定するのではと

透明あぼーんした場合

話が繋がらなくなることがあり

そしてボケの兆候をば示し

あとは周囲や病院が仕上げをし

という具合だ

心理学ではこのあぼーんを抑圧と言った

無意識は海である

意識は上にちよつと出ている陸地である

あぼーんを増やすとは海に捨てること

増えれば水位が上昇し、陸地が水没する

無意識を照らす光がある

創作活動の中に

なぜこんなことを考えるかというと

父母の年齢の方が、やはりボケがちで

けれど仕上げと書いた周囲の扱いも

酷<sup>ひど</sup>いんじゃないのかといふかり

今夜も人の意識にサーチライトを当てる

## インシャラー

昔、私は思っていたものだった  
運命という言葉は

いい意味で使っているなら  
幸せな思い込み

悪い意味で使っているなら  
何もしない人間の言い訳だと

自力を頼むほどに健全で傲慢で  
しかし人生の荒波に吞まれた今

何もかもえー、神まかせ  
自分より大きな力の前にひざまずく



といて寝ているわけじゃない  
やるべきことはやってるんだよ

寝てたよね、寝てた  
いえ、御心のままに

All in my mind

コーヒーを飲みぼやけた頭で考える  
完璧な受け答えと言われても  
受け答えた覚えがない

自室に一人居り  
それでも客寄せパンダのようになった  
手足よ

僕はもう正しいとか間違いつか気にはせず  
話したいのだ

いや、少しは気にしてくださいよ  
やはり目の前の人に集中してだ

そうなんだね

意識の 変えようで  
僕は自由になりうる



## あとがき

この詩集は二〇二二年五月から八月にかけてネットに投稿したものをまとめた。怒濤どとうのような数か月だったが、書いてあるのはわりと卑近な問題が多い。家庭の軋轢あつれきとか、そんなものから湧いてくる言葉。それが政治の話にもなったり、思想の話にもなったりする。

時事ネタばかりでは歳月に耐えないかもしれないので、並べ順はランダムで。あまり流れのわからない感じにした。

怒濤のようなと書いたが、ここ数年ずっとそんな感じなのでもういくらか鈍くなっている自分もいる。前代未聞の一年とか、空前絶後の大被害とか。強調もずっと使えば効果を失うのだなど。こちらで少し調子を弱めてほしく、せめて僕だけでもゆるいものが書きたいと常々思っている。

では、手に取ってくださった方に感謝を込めて。

二〇二二年八月八日

多田龍介



雨音を聞きながら



著	者	者
多	田	多
龍	介	田
龍	介	龍
介		介

発行所  
明水工房

発行者  
多田龍介

著者  
多田龍介

令和四年八月八日 初版発行

